

東インド会社（I）

East India Company (1)

岩瀬 健治
Kenji Iwase

This paper deals with Charles Lamb and East India Company, with what the Company was, and with its influences on the world, especially on the Orient.

I. ラムと東インド会社

イギリスの随筆家・評論家チャールズ・ラム（Charles Lamb）⁽¹⁾は、彼の ‘The Superannuated Man’ ⁽²⁾ という一篇につぎのように書いている。

It is now six and thirty years since I took my seat at the desk in Mincing Lane.⁽³⁾ Melancholy was the transition at fourteen from the abundant playtime, and the frequently intervening vacations of school days, to the eight, nine, and sometimes ten hours' a-day attendance at a counting-house. But time partially reconciles us to anything. I gradually became content—doggedly content, as wild animals in cages.⁽⁴⁾

ラムは、ロンドンの法学院テンブルのなかで、ある法学者の執事の子として生れた、いわば、中流の下層階級の出であった。1782年、7歳で給費制の学校クライスト・ホスピタル（Christ's Hospital）に入学し、ここでのちに詩人・批評家として名を成した、コールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）と知り合った。コールリッジはラムより3年先輩の成績抜群の上級生で、ケンブリッジ（University of Cambridge）への進学が約束されているほどの優秀な学生だった。

それに対して、ラムは7年間在学したあと、1789年に、経済上の理由、身体上の理由（ひどい吃音だった）などで大学進学、そして詩人になることを断念して中途退学し、14歳で兄の勤めていた南海商会（South Sea House）⁽⁵⁾に書記として就職した。その後、1792

年、17歳で東インド会社⁽⁶⁾に会計係として転じ、1825年、50歳で隠退するまで33年間勤めた。「エリア随筆」の大部分はこの東インド会社に勤務するかたわら、しかもその末期に書かれた。

そして、この33年間も勤めた会社を退職するに当って、次のようにも書いている。

Independently of the rigours of attendance, I have ever been haunted with a sense (perhaps a mere caprice) of incapacity for business. This, during my latter years, had increased to such a degree, that it was visible in all the lines of my countenance. My health and my good spirits flagged. I had perpetually a dread of some crisis, to which I should be found unequal. Besides my daylight servitude, I served over again all night in my sleep, and would awake with terrors of imaginary false entries, errors in my accounts, and the like. I was fifty years of age, and no prospect of emancipation presented itself. I had grown to my desk, as it were; and the wood had entered into my soul.⁽⁷⁾

以上のように50歳の退職をまえにした心境を述べているが、止むを得ず入った東インド会社とはいえ、30年以上も勤めあげ、‘doggedly content, as wild animals in cages’ と書いたり、退職したあとも自分の職場に行ってみたりしているところを見ると、ラムの心境はもっと複雑なものであったようである。

ある日、突然ラムは重役たちのまえに呼び出される。

My fellows in the office would sometimes rally me upon the trouble legible in my countenance; but I did not know that it had raised the suspicions of any of my employers, when on the 5th of last month, a day ever to be remembered by me, L——, the junior partner in the firm, calling me on one side, directly taxed me with my bad looks, and frankly inquired the cause of them. So taxed, I honestly made confession of my infirmity, and added that I was afraid I should eventually be obliged to resign his service. He spoke some words of course to hearten me, and there the matter rested. A whole week I remained labouring under the impression that I had acted imprudently in my disclosure; that I had

foolishly given a handle against myself, and had been anticipating my own dismissal. A week passed in this manner, the most anxious one, I verily believe in my whole life, when on the evening of the 12th of April, just as I was about quitting my desk to go home (it might be about eight o'clock) I received an awful summons to attend the presence of the whole assembled firm in the formidable back parlour. I thought now my time is surely come, I have done for myself, I am going to be told that they have no longer occasion for me. L——, I could see, smiled at the terror I was in, which was a little relief to me,——when to my utter astonishment B——, the eldest partner, began a formal harangue to me on the length of my services, my very meritorious conduct during the whole of the time (the deuce, thought I, how did he find out that? I protest I never had the confidence to think as much). He went on to descant on the expediency of retiring at a certain time of life (how my heart panted!), and asking me a few questions as to the amount of my own property, of which I have a little, ended with a proposal, to which his three partners nodded a grave assent, that I should accept from the house, which I had served so well, a pension for life to the amount of two-thirds of my accustomed salary⁽⁸⁾——a magnificent offer! I do not know what I answered between surprise and gratitude, but it was understood that I accepted their proposal, and I was told that I was free from that hour to leave their service. I stammered out a bow, and at just ten minutes after eight I went home——for ever. This noble benefit——gratitude forbids me to conceal their names——I owe to the kindness of the most munificent firm in the world——the house of Boldero, Merryweather, Bosanquet, and Lacy.⁽⁹⁾

Esto perpetua!⁽¹⁰⁾

ラムはここで急にひまになって時間を持て余し、「これでは時間という財産を管理してくれる執事が欲しくなった」などとユーモアたっぷりに書き続けるが、やがて落ち着いてくると、毎日一緒に仕事をしていた仲間とまったく会わなくなったのが妙に変に思えてきて、会社へ出掛けてみる。すると、自分が使っていた机や帽子掛けをもう他の人が使っているのを見て、「当りまえのことなのだが、なんだか私には嬉しくなかった」と、会社へ

の思い、懐かしさも率直に告白している。

ラムはこの随筆の結びで言う。

I am no longer * * * * *, clerk to the firm of, & c. I am Retired Leisure. I am to be met with in trim gardens. I am already come to be known by my vacant face and careless gesture, perambulating at no fixed pace nor with any settled purpose. I walk about; not to and from. They tell me, a certain *cum dignitate* air⁽¹¹⁾ that has been buried so long with my other good parts, has begun to shoot forth in my person. I grow into gentility perceptibly. When I take up a newspaper it is to read the state of the opera. *Opus operatum est.*⁽¹²⁾ I have done all that I came into this world to do. I have worked taskwork, and have the rest of the day to myself.⁽¹³⁾

この最後の部分を、この一篇のタイトル ‘The superannuated man’ の次に掲げられた “Sera tamen respexit Libertas.” Vergil.⁽¹⁴⁾ 「遅ればせながら、自由が私を思い出してくれた」に続く、 ‘A Clerk I was in London gay.’ O’keefe⁽¹⁵⁾ と合わせてみると、いくらかの潤色、誇張があるとはいえ、定年退職者のいちまつの淋しさを、33年間の会社勤めからの解放感、これからは自分の好きなことをすることができるという期待感とともに、読みとることができる。

ラムは、1825年3月29日、50歳で東インド会社を、「永久に」退職し、「年金生活者」(‘The Superannuated - Man’⁽¹⁶⁾) になった。以後、病身の姉メアリィに後見人として尽し、一生独身を通して、1834年姉よりも13年早く、58歳でこの世を去った。



チャールズ・ラム



EMIA
7212

Charles Lamb
From a drawing by Daniel Macdore
for the caricature in Fraser's Magazine.

ラムの勤めたこの東イン

東印度会社のデスクに向かって帳簿をつけるラム▲

ド会社には、ミル⁽¹⁷⁾も35年間勤め、ピーコック⁽¹⁸⁾も20年勤めて実務的な手腕を発揮した。ミルは、経済学者、哲学者であり、東インド会社が解散するまで勤めあげた。

このように学者、文筆家の3人が勤めた、しかも長い間勤めあげた東インド会社とは、どんな会社であったのだろうか。いくら生活のため「寄らば大樹の陰」といっても、彼ら3人にとってやはり魅力ある勤め先だったのであろう。

とくに名門クライスト・ホスピタルに籍を置き、実直で成績優秀な生徒として大学進学も当然のこととされていたラムにとっては、南海商会という業績の悪化した会社をステップにしたとはいえ、入社するに値し、33年もの長い間勤める価値のあるところだったのである。

では、その東インド会社とはどういう会社であったのだろうか。その時代背景とともに調べてみる。

II. 東インド会社設立の序曲

（1）東方への風

1. マルコ・ポーロ（Marco = Polo）

日本をジパング（Zipangu）の名でヨーロッパの人々に紹介し、「黄金の国」（El Dorado）と説明したのは、マルコ=ポーロ（1254? - 1324? ⁽¹⁹⁾）であった。極東（Far East）のことについてはほとんど何も知らなかった中世のヨーロッパの人々に、アジア、とくに東アジアについての知識を与え、その目を開かせたマルコ=ポーロの功績は偉大であった。

マルコ=ポーロは、イタリアのヴェネチア（Venezia）の商人で、彼がジェノヴァ（Genova）の獄中⁽²⁰⁾で口述した「世界の記述」（東方見聞録，Il Milione）は、1299年に完成したのだが、当時地中海やその周辺地域で活躍し、都市国家⁽²¹⁾として競い合っていたヴェネチア、ジェノヴァ、ピザ（Pisa）などの商人に、深い影響を与え、彼らの競争心をかきたてた。

マルコが、父や叔父と共に扱っていた商品は、宝石、真珠、黄金などの高価なものが主だったが、ときには、香料、薬種、織物、毛皮なども売買した。その辿ったルートは大体次の通りであった。

〔往路〕ヴェネチア（Venezia）→地中海（Mediterranean Sea）→ライアス（Laias，トルコ南東部の都市，別名アヤス，Ayas）→タブリーズ（Tabriz，イラン北西部の都市）

→イエズド (Yezd, イラン中部の都市) →キルマン (Kirman, イラン南部, ホルムズの北方の都市) →ホルムズ (Hormuz, イラン南部の都市) →キルマン (Kirman, イラン南部, ホルムズの北方の都市) →バルフ (Balkh, アフガニスタン北部の都市) →カシュガール (Kashgar, 喀什, 中国西部新疆ウイグル自治区の都市) →ホータン (Khotan, 和田, タクラ・マカン砂漠, Takla Makan Des.の南西方, チベット高原, Tibet Plat.の北西の都市) →シャチョウ (Sha-Chou, 沙洲, 後の敦煌, 中国北西部甘粛省の都市) →カンチョウ (Kan-Chou, 甘州, 中国北西部甘粛省中央部の都市) →リアンチャー (Liang-chou, 涼州, 別名武威, 中国北西部の都市) →シャントウ (Shan-Tu, 上都, 中国北部にあり今は遺跡になっている, フビライ=ハンが、ハンまたはカン、つまり皇帝の位に就いたところ)。この他に途中バグダド (Baghdad, イラクの首都) を通って、ペルシャ湾 (Persian Gulf) に出てホルムズ (Hormuz) に達したという説もある。

[復路] シャントウ → カーンバリク (Khanbalik, 汗八里, 現在の北京) → キンサイ (Quinsay, 杭州, 中国の銭塘江の河口の都市) → チュアンチョウ (Ch'uan-chou, 泉州, 中国南東部の都市) → 南シナ海 (South China Sea) をインドシナ半島 (Indo China Pen.) の南岸沿いにマレー半島 (Malay Pen.) の南端を回って、マラッカ海峡 (St.of Malacca) を通りインド洋 (Indian Ocean) に出た → コーチン (Cochin, インド西南端の都市) → ブロアチ (Broach, インド北西部のナルマダ川, Narmada R.の河口都市) → ホルムズ (Hormuz, イラン南部の都市, 往路も通ったところ) → シラズ (Shiraz, イラン南西部の都市) → タブリーズ (Tabriz, イラン北西部の都市, 往路も通ったところ) → トレビゾンド (Trebizond, トルコ北東部の黒海, Black Sea, に臨む都市, 現在のトラブゾン, Trabzon) → 黒海を渡ってコンスタンチノーブル (Constantinople, トルコ北西部のボスポラス海峡、Bosporus Str.に臨む都市、現在のイスタンブール, Istanbul, ヨーロッパとアジアの接点の都市といわれている) → エーゲ海 (Aegean Sea) → ギリシア (Greece) の南端を回って、アドリア海 (Adriatic Sea) に入りヴェネチア (Venezia) に帰着。

マルコは、6歳のとき父のニコロと叔父のマフェオの大国モンゴル (Mongol) への旅の話聞いて、彼らの9年間の大旅行に胸をときめかし、再びモンゴルへ行く決心をした二人に従って、1271年ベネチアを出発した。マルコ17歳であった。1275年、三人はモンゴルの元帝フビライ=ハン (Kublai Khan, 1216? - 1294)⁽²²⁾に会い、厚遇されて中国奥地の雲南やビルマ (現在のミャンマー、Myanmar) にまで足を伸ばし商用を足し、現地

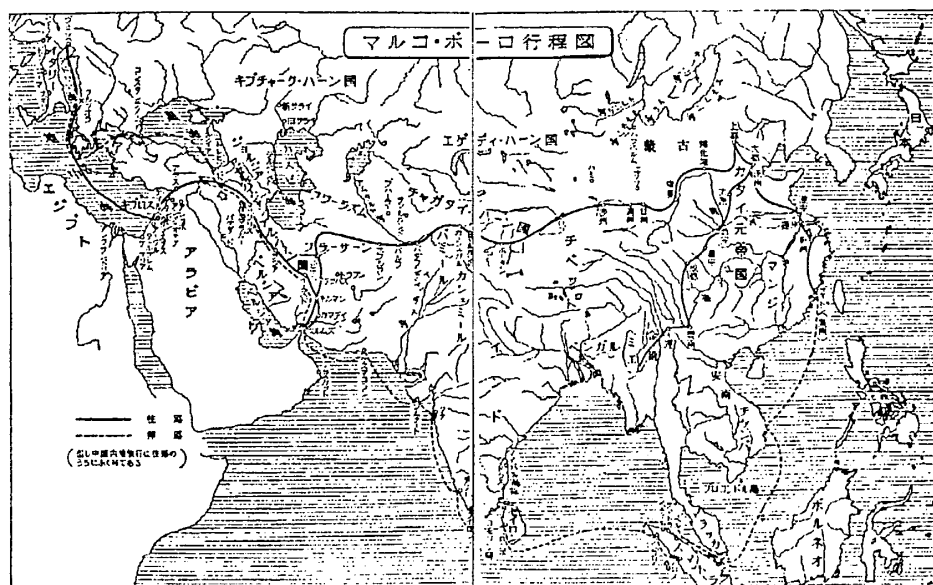
の実情を把握した。

モンゴル滞在10年を超えたころ、マルコの父と叔父は年齢を重ねるとともに望郷の念や
みがたく、3人は1290年泉州を出航し帰途についた。ヴェネチアに帰着したのは1295年、
実に出発してから足掛け26年後のことであった。マルコたち3人は、帰途につくときそれ
までに貯えたすべての富を、黄金に代えるのではなく、ルビー、サファイア、ダイヤモンド
、エメラルドなどの宝石類に代えて、粗末な毛織物の3着の衣服に縫い込んでヴェネチ
アへ持ち帰った。

マルコは、持ち帰った商品で莫大な利益をあげたが、さらに自分の見聞したことをメモ
にしている、旅行途中の土地や住民の生活・習慣などを詳細、的確に記したものを持って
いた。ジパングと呼んで自分が行ってもいない日本のことに触れているところなど、荒唐
無稽な説明もある⁽²³⁾が、地理上の知識や、各地の住民の風俗習慣などの記述は、その正
確さを後世の探検家・航海家が証明している。彼はその後も貿易の仕事に従事し、傍ら東
方への旅の見聞を語り続けたが、そのあまりにもけた外れな話に人々は信用せず、彼を「百
万のマルコ殿」（うそ八百のマルコ）と呼んだという。マルコは70歳でヴェネチアで生涯
をとじた。

マルコ＝ポーロの名前は、大ぼらふきの代名詞として使われるほどヨーロッパの人々の
想像・理解を超えた、東方の進んだ状況についての知識を持つことを示すものであったが、
彼の旅行記の内容の大部分は事実であった。その真価は数世紀後に認められることになっ
た。中央アジアを探検・調査したスタインや⁽²⁴⁾ヘディン⁽²⁵⁾は、出発の時、必ずこの「東
方見聞録」

を携帯して
自分たちの
踏査の結果
と照し合わ
せて、13世
紀のマルコ
・ポーロの
記述の正確
さに驚いた
という。



マルコ=ポーロのほかに、このモンゴル帝国と交流したのは、主として修道士たちで彼らは教皇や国王の命を受けてキリスト教の布教と現地の事情の視察に当たった。そのなかでも、モンテ=コルビノ (Monte Corvino, 1247-1328)⁽²⁶⁾ は、ローマ教皇の使節として1294年、フビライ=ハンの死の直後に、当時の元の首都の大都 (カーンバリック, Khanbalik, Khanは皇帝、balikは城市の意、現在の北京) に入り、初めてカトリック (Katholiek) の布教活動をした。大都に教会堂を建てて、4,000人ほどの信者を得、1307年初代の大都管轄の大司教 (archbishop) に任ぜられた。布教に当ること30有余年、その間「新約聖書」 (the New Testament) のモンゴル語訳を作成したりもして、モンゴルの地で没した。

商人のマルコ=ポーロ、宣教師のモンテ=コルビノたちが往来したシルクロード⁽²⁷⁾には絶えずいろいろな困難と危険が伴い、莫大な時間と費用が必要であったが、それを補って余りある成果と利益を期待して、西方からの使節・隊商がほとんど途絶えることなく東方へ、中国へとやってきた。そのルートは三通りあり、シルクロード (オアシスの道) と海路 (ペルシャ湾からインド洋に出て、沿岸ぞいに中国へ行く) の他に、もう一つは北方の大草原地帯を行くステップロード (Steppe Road, 草原の道, 毛皮の道) があり、それは黒海 (Black Sea) の北東岸に上陸して、カスピ海 (Caspian Sea) に注ぐヴォルガ川 (Volga R.), ウラル川 (Ural R., カザフスタン、Kazakhstan西部) を渡って、アラル海 (Aral Sea) の北側を通してサマルカンド (Samarkand, ウズベキスタン, Uzbekistanの北東部) に達し、タシケント (Tashkent)、ビシュケク (Bishkek, キルギスKyrgyzの北部) と東へ進み、ウルムチ (烏魯木齊、中国北部) を通過してハミ (哈密) でシルクロードと合流する、あるいは直接大都へ向うルートであった。

このほか、アルタイ山脈 (Altai Mts.) を越え、モンゴル高原 (Plat. of Mongolia) に入り、カラコルム (karakorum、現在は遺跡) を経て、長城地帯にいたるもっとも北側の草原の道もあるが、これらの道は遊牧民族や騎馬民族の活躍の舞台であり、様々な文化も伝えられた。しかし、彼らの武力による活動・掠奪は中央アジアのオアシス地域 (シルクロードの道で結ばれる) や、東西の各地域を結ぶ文化圏をも脅かし、ときには東西の交易・交流の妨げにもなった。

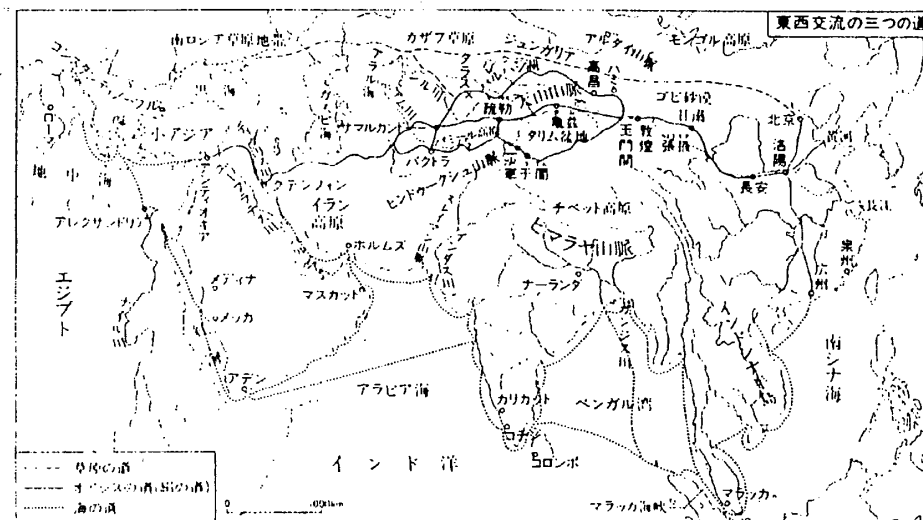
2. 海のルート (Marine Route)

マルコ=ポーロの東方への旅は、往路に4年、復路に5年ほど費したが、そして往復とも伝聞、交易の旅であったことを割引いても、長い年月を必要とし、莫大な費用がかかっ

た。またときには、極めて困難なまた危険な旅になることもあった。

そこで、地中海から紅海、あるいはペルシャ湾を通り、アラビア海を渡ってインドに到達する海のルート⁽²⁸⁾が見直され、さらにインド洋（Indian Ocean）からベンガル湾（Bay of Bengal）に入り、東南アジアの沿岸地域を経由して中国にいたる航路が使われた。

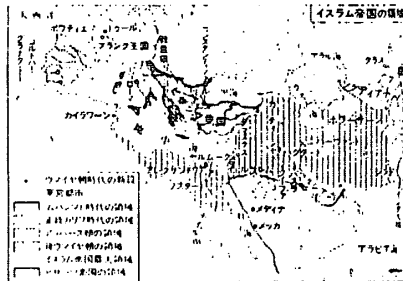
船による輸送の最大の利点は、馬やラクダの隊商（caravan）による輸送に比べて大量に輸送することができるという点にあった。南インドはこの海のルートの中継地としての中心的役割を担っていた。マラッカ海峡（Str. of Malacca）やインドシナ半島（Indo China Pen.）南部などはインドと中国を結ぶ、航海上の要衝であった。



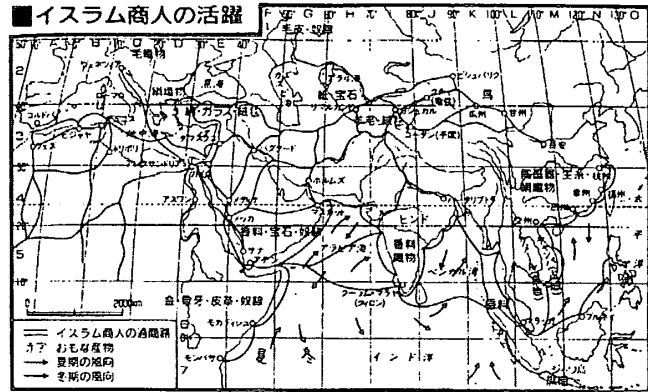
▲ 東西交流の三つの道の図

8世紀頃になると、イランやアラブのムスリム（Muslim）⁽²⁹⁾商人が海上にも進出し、西はイベリア半島（Iberian Pen.）の地中海沿岸のバルセロナ（Barcelona）やバレンシア（Valencia）にまで到達し、東は中国沿岸の広州（コワンチョウ、現在のCanton、広東）や泉州（チュワンチョウ）などの海港に入港して活発に交易活動⁽³⁰⁾を行った。毎年行われるメッカ（Mecca）への巡礼（ハッジ、Hajj）⁽³¹⁾も、単にイスラム教（Islām）⁽³²⁾の布教・伝播だけでなく、人と物の交流を盛んにしイスラム文化圏の確立・拡大に貢献した。イスラム教の聖典「コーラン」（Quran）には、貧者や旅人を保護することがくりかえし説かれていて、たとえば、モロッコ出身のイスラム教徒の旅行家イブン=バットゥータ（Ibn Battutah, 1304～68/69または77）が、大規模な旅行⁽³³⁾ができたのも、訪れる各地の旅人を歓待する社会慣行のお陰であった。このような人の往来、物の流れを通じて学問の成果や織物・灌漑の技術などの新しいもの⁽³⁴⁾が遠く離れた地域にも伝えられて

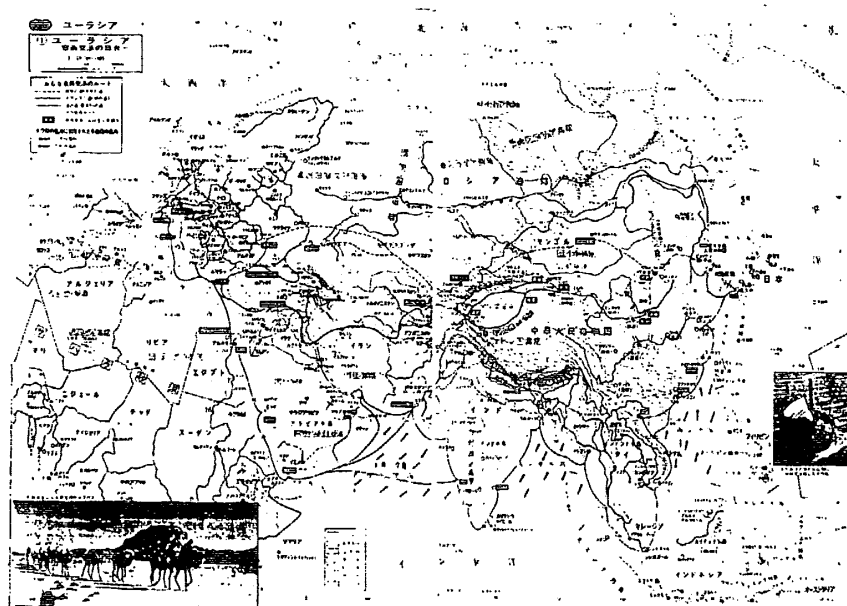
いった。



▲ イスラム帝国の領域



9世紀のアッバース（Abbāsids）朝になると、首都はバグダードに移り、イスラム文化は最盛期を迎えた。交易の面でも、イスラム教徒の商人たちは、香辛料・陶磁器・金・奴隷などを、さらに活発に大量に求めてイスラム世界の外へも進出し、活躍した。遠隔の地にはラクダを使う隊商（caraven）貿易と、帆で走るダウ船（dhow, またはdow）⁽³⁵⁾を用いる商船貿易とが行われた。隊商はシルクロードを通して西アジアと中国とその周辺との間を往復し、ビザンツ（Byzanz）帝国（東ローマ帝国）の小アジアやアフリカの内陸へと入っていった。いっぽう商船は、季節風（monsoon）⁽³⁶⁾を利用し羅針盤を⁽³⁷⁾使って地中海やインド洋を自由に航行して、遠くは東南アジアの地域や中国の沿岸の杭州、泉州にまで達していた。



3. 十字軍（Crusades）

十字軍が遠征するきっかけになったのは、セルジューク（Seljuk）朝のイスラム教徒のシリア（Syria）進出による危機感を持ったビザンツ帝国（東ローマ帝国）のアレクシオス一世（Alexios I, 位1081－1118）が、ローマ教皇ウルバヌス二世（Urbanus II, 位1088－1099）に救いを求めたことであった。教皇は教皇権強化のチャンスととらえ、フランスのクレルモン（Clermont）で宗教会議^{（38）}を召集し、「神がこれを望む」として、聖地奪回の大号令を発した（1095）。当時、ドイツ・フランス・イギリスの三国の国王たちはいずれも破門されているときだったので、フランス・イタリアなどの諸侯・騎士を中心に、一旗挙げようとする浪人や農民も合流して、1096年8月に第一回十字軍（1096－1099）が出発した。兵士たちに守られた巡礼者も含めると、その数は10万人にも達したという。遠征は主として陸路により、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）領に入り、小アジア（現トルコ領）から地中海の海岸沿いに南下して、1099年7月に聖地イエルサレム（Jerusalem）^{（39）}を占領し、イスラム教徒（Islām）やユダヤ教徒（Judaists）の大量虐殺という蛮行の末、イエルサレム王国（1099－1291）を建国した。有力な指導者の一人であったゴドフロア＝ド＝ブイヨン（Godefroy de Bouillon）が統治者・王になり、正式には「聖墳墓守護者」と称された。その後、領土・土地の分配にあずかった少数の諸侯・騎士や市民・農民をのぞき、遠征に参加した大部分のものは帰途につき、あとには聖地に常駐して、巡礼者の保護と貧者・病人・死者の面倒をみる騎士修道会の名のもとに、聖ヨハネ騎士団などが設立された。

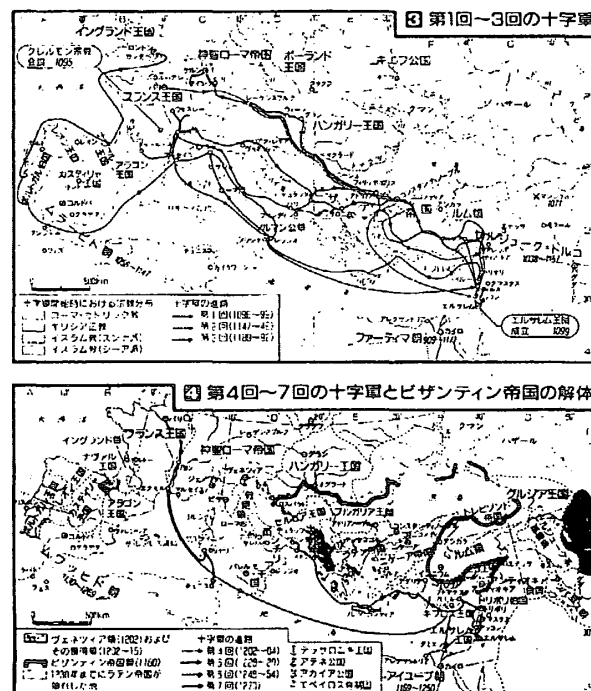
その後間もなく、イスラム側の反撃が始まり、北方の領土が奪還されると、フランス王ルイ七世と神聖ローマ帝国（ドイツ）王コンラート三世が第二回十字軍（1147－1149）を組織してシリアの拠点だったダマスカス（Damascus）を攻撃したが、十字軍内部の不和もあって失敗した。

その頃、シリアのクルド人（Kurds）の出であった将軍サラディン（Saladin, 正しくはサラフ＝アッディーン Salah al-Din, 位1169－93）が頭角をあらわし、イスラム王朝の実権を握ってアイユーブ朝（Ayyub, 1169－1250）を開き、イスラム世界の統一をはかって対十字軍の戦いを積極的に推し進め、1187年、遂に約90年ぶりに聖地イエルサレムを奪回した。

以後、第三回（1189－1199）、第四回（1202－1204）、第五回（1228－1229）、第六回（1248－1254）、第七回（1270－1291）と、2世紀間にも及ぶ十字軍遠征を通じて、ビザンツ帝国の

衰退、ローマ教皇の威信の低下、東方の領土や富の獲得を目指した諸侯・騎士たちの勢力の減退という結果をもたらし、相対的に力を強めていったのは各国の王たちであったといわれているが、この十字軍の遠征から最大の利益を得たのは、実は北イタリアの諸都市であった。

13世紀初頭、第四回十字軍の結成・遠征を提唱したのは、教皇権を握りその絶頂期にあったインノケンティウス三世（Innocentius III, 位1198-1216）であったが、ヴェネチア（Venezia）の総督の進言によって十字軍は聖地に向かうことなく、コンスタンチノーブル（Constantinople）を占領・略奪の限りをつくし、ラテン（Latin）帝国を樹立した。帝国領は諸侯・騎士たちに与えられ、ヴェネチアもコンスタンチノーブルの一部や多数の島々と沿海の地域を手に入れた。この十字軍の脱線、聖戦の名を借りた侵略の背景にあったのが、諸侯・騎士たちの領土欲の陰に隠れた地中海交易をめぐるビザンツ（東ローマ）帝国（Byzanz）とヴェネチアなど諸都市の対立であった。その後の第七回までの十字軍の遠征、パレスチナ（Palestine）の十字軍国家とも失敗、滅亡に終わり、聖地回復はならなかった。



4. 交易の発達と都市の成立

東方でのビザンツ帝国とイスラム世界との聖地巡礼をめぐる対立と十字軍の遠征の長期化に対し、西方のイベリア半島（Iberian Pen.）でも、10世紀頃からキリスト教徒のレコンキスタ（Reconquista, 国土回復運動）⁽⁴⁰⁾が盛んになり、イスラムとの戦いにより北部の各地にキリスト教の小王国・公国が自立していた。

西ヨーロッパの王国・公国の封建社会が安定しその荘園（王侯・貴族の私的な所有地）内の生産が増大すると、人口は急速に増加し開墾・移住が盛んに行われ、各地に余った生産物の交換をする定期の市が開かれ、長い間停滞状態にあった商取引が再び活気を帯びてきた。さらに、イスラムの商人や北方のヴァイキング（Viking）⁽⁴¹⁾の商業活動によって貨幣の使用が盛んになると安全で交通の便利な、人の多く集る場所に商人の集落（ヴィク wik）を作る商人も出てきた。そのような集落が領主たちの荘園で働いていた手工業者などを吸収して、徐々に都市（中世都市）の形に発展した。

交易の範囲も、都市とその近郊の農村のようなごく限られたものだったものが、イスラム商人や十字軍などの影響を受けて、だんだんと遠隔地との交易が盛んに行われるようになった。その中心となったのが、地中海、北海、バルト海（Baltic Sea）であり、地中海では、イタリアのヴェネチア（Venezia）、ジェノヴァ（Genova）、ピザ（Pisa）などの海港都市が、東方貿易（レヴァント，Levant，⁽⁴²⁾貿易）により香辛料や絹織物のような仕入れ値の安い商品を輸入して莫大な利益をあげた。ヴェネチアなどの当時の立派な商館が現在でも市庁舎などとして使われている。

北海・バルト海では、北ドイツのハンブルク（Hamburg）・ブレーメン（Bremen）・リューベック（Lübeck）や、ネーデルランド（Nederland，オランダ）のフランドル（Flandre）地方⁽⁴³⁾のアントワープ（Antwerp）・ブリュージュ（Brugge）・ガン（Gent）、イングランド（England）のロンドン（London）・ブリストル（Bristol）などが、毛織物・穀物・毛皮・塩・鉄・木材・海産物のような生活必需品の取引引きをして栄えた。

このような沿岸諸都市の発展が、その販路を求めて内陸部に手を広げ交通の要衝も兼ねる商業都市を発達させた。フランスのシャンパーニュ（Champagne）地方⁽⁴⁴⁾、ドイツのケルン（Köln）・マインツ（Mainz）やドナウ（Donau）川上流のニュールンベルク（Nürnberg）・アウグスベルク（Augsburg）・ミュンヘン（München）、さらにフランスのセーヌ（Seine）川沿いのパリ（Paris）・ルーアン（Rouen）や、ローヌ（Rhône）川沿いのリヨン（Lyon）、ガロンヌ（Garonne）川下流のボルドー（Bordeaux）などが繁栄した。これらの都市では必ず河川、運河が重要な交通路として物資の輸送、商人・買い手の往来に使われ、運輸・運送業も発達した。

都市の成立・発展は、形態の面でも共通点が見られ、石造りの街、城壁・城門のある都市になっていて、外部の世界（農山村地帯）とは城門によってわずかにつながっていた。ヨーロッパの都市名によくある－ブルク（－burg），－バラ（－burgh）の語尾は、この

城壁を意味している。城壁で囲まれた都市の中心部には、市（市場）が開かれる広場（Marktplatz）があり、人の集まる広場に沿って立派な教会と堂々たる市庁舎が建ち、その教会と市庁舎・市会議事堂（Rathaus）の高い尖塔は遠方からも望見することができて、都市の位置を知らせる標識にもなっていた。このようなある程度画一的ともいえる形態は、都市が商工業の中心であったばかりでなく、宗教と政治の中心になっていたことを示している。

都市の成立は軍事力を握る皇帝・領主の保護を受けた結果でもあったが、都市の商工業者たちの経済力が飛躍的に上昇したところでは、彼らの自治への要求が高まっていった。一方において、皇帝・領主たちにとっては都市の商工業者たちへの課税や関税の収入は重要な財源であった。そして、時によっては両者の交渉がスムーズにいかないこともあった。普通は、商工業者たちが特許状を買い取っていろいろな権利（交通権・居住権・市場権など）を手に入れて、自治権を獲得するという手続をとった。しかし、領主・諸侯と都市市民の力関係によって、市民がコンミュン（Commune, 団結の誓約を交した団体）を結成して戦うこともよくあった。

13世紀に入ると、西ヨーロッパのドイツ・フランスを中心に各地で、独自の自治権（政治・経済上の諸権利）を持つ自治都市が生まれ、従来の王侯貴族・聖職者・農民のほかに新たに商工業者を中心とする市民階級という身分のものが現れた。市民階級が中心の自由都市は自立したものの、人口、規模、行政などの点で既存の皇帝や諸侯を持つ都市に劣るものが多く、その軍事的圧力に対抗したり、あるいは折角手にした共同の利益を守るために都市間の同盟を結んだ。諸同盟の中で、規模と期間が長く、よく知られているのが、13世紀から17世紀まで存続した北ドイツのハンザ同盟（Deutsche Hansa）⁽⁴⁵⁾である。その最盛期は14世紀で、リューベックを中心にハンブルク・ブレーメン・ケルン・ダンチヒ（Danzig）など加盟市は実に100を超え、北欧・ロシア・イギリス・ネーデルランドなど、地中海沿岸を除く全ヨーロッパを商業活動の舞台にして同盟の強さを誇った。ロンドン、ベルゲン（Bergen）など4ヶ所の拠点に在外商館を設置し、種々の紛争に備えて商圏の確保に努めた。しかし、15-16世紀以降の中央集権国家の台頭と、オランダ・イギリス商人の登場によって打撃を受け、17世紀の三十年戦争⁽⁴⁶⁾を機に消滅した。

5. 都市の市民

古くからのドイツの言伝えに「都市の空気は自由にする」（Stadtluft macht frei）が

あるが、荘園に縛られた農民・農奴と比べれば都市の住民の生活は自由であった。しかし、都市の住民がすべて自由・平等であったわけではなく、財産（家屋敷）のある市民とそれを持たない下層市民の区別があって、職人・徒弟・賃金労働者・貧民・乞食などが、下層市民たちであった。彼らは都市とくに商業都市の発展の結果がもたらす産物であり、大きな都市の片隅にへばりつくような生活をしていた。

そしてそのような市民の区分けから、各種商品の生産・流通から日常の市民生活全般、例えば冠婚葬祭などまでを守り、規制し、取り仕切るギルド（guild）^{（47）}が生れた。ギルドは本来商人たちの同業組合で、組合員の間の相互扶助と市場・商品の品質・職人の技術・商品の価格の維持と確保を目的として、11世紀頃から主として西ヨーロッパの都市に発生した。ギルドは、都市の自治権獲得運動、自由都市成立の中心的役割を果たしたために、商人ギルド（merchant guild）の指導者の大商人たちが市議会を牛耳るようなこともあった。それに対して、より職人色の濃い手工業者たちも、12世紀頃から同職ギルド（craft guild, ツunft Zunft）^{（48）}を結成し、市政への参入を目指したが、一部の親方層を除いて市民権は得られなかった。

ギルドの指導者層の市政への参加は、ギルドの代議にとどまらず、結果として新たな都市貴族層を生むことにもなった。15世紀のイタリアのフィレンツェ（Firenze）の市政を独占したメディチ（Medici）家^{（49）}や、同じく15世紀にイタリアとの香料・羊毛などの取り引きで財をなして、皇帝や教皇の地位をも左右したアウグスブルクのフッガー（Fugger）家^{（50）}などがその例である。彼らは商業金融資本家の典型的な存在であり、荘園経済の基盤であった土地に代って、新しい富である貨幣が支配する時代の先頭に立った。この富の力を持った市民とそれを追い求める市民たちによって、ヨーロッパの新しい時代が開けていくことになる。

（2）東方への進出

1. 大航海時代の前兆

レコンキスタ（注. 40参照）の終了^{（51）}に合わせるかのように、15世紀末からヨーロッパ世界は外へ向かって積極的に進出し始める。

ムスリム（Muslim, イスラム教徒）によるイスラム世界の拡大、十字軍の七回に及ぶ遠征、ヴェネチアを中心とする商業都市の繁栄などは、東方の地域との接触・交流・交易による莫大な富と知識をヨーロッパ世界にもたらした。また、モンゴルの西方進出により

ユーラシア大陸（Eurasia）を横断する交通路が見直されたり、マルコ=ポーロの「東方見聞録」やイブン=バットゥータの「三大陸周遊記」、モンテ=コルビノなどの修道士・宣教師たち、その他の直接東アジアを訪れた商人や使節の情報が様々な面で人々の東方への興味・関心を高めた。

さらに、大帝国オスマン（Osman, 1299-1922）⁽⁵²⁾が、その最盛期15, 16世紀（主としてスレイマン一世, Suleiman I, の時代、1520-1566）に、アジア・アフリカ・ヨーロッパの各地域にまたがる国土を有し、東西の貿易路を抑え、ストップさせたことが新ルートの探検・開発の大きな動機になった。というのは、その当時アジアからの産物、胡椒などの香料⁽⁵³⁾はすでにヨーロッパの人々の必需品になっていて、その売買は莫大な利益をもたらすものになっていたからである。

そして、ヨーロッパ世界（イスラム世界に代る）の拡大を促したもう一つの理由は、当時ようやく進められていた西欧諸国の中央集権化により各国王たちが、探検活動・新航路の開発事業を支援したこと⁽⁵⁴⁾であった。

このようにして進められた新航路開拓の時代は、未知であった「地理上の発見の時代」であり、利を求めて乗り出す「大航海の時代」でもあった。

2. ポルトガル（Portugal）とスペイン（Spain）の進出

ポルトガルの首都リスボン（Lisbon）は、地中海と北海を結ぶ中継地として栄え、アヴィス（Avis, 1385-1580）朝時代に絶対主義化され、海外進出が積極的に行われた。初代国王ジョアン一世（João I, 位1385-1433）の子エンリケ（Henrique, 1394-1460）は、「航海王子」と呼ばれるほどに、1415年モロッコ（Morocco）の商業都市セウタ（Ceuta）の攻略を皮切りに、アフリカ西海岸とその近海の大西洋諸島の探検・航海を進めた。その後、ポルトガルはアフリカ沿岸の南下政策を推進し、インド航路開拓の計画を練り、1488年、バルトロミュー=ディアス（Bartholomeu Dias（1450頃-1500）は、アフリカ最南端の岬に到達し、この岬は「喜望峰」（Cape of Good Hope）と当時の国王ジョアン二世（João II, 位1481-1495）によって名付けられた。これによってアフリカを迂回して東インドへ達する新航路発見の夢が実現に近づき、ポルトガルの海洋帝国への道が開かれた。

アフリカ東海岸についても、1497年、それまでに集められた情報のもとに、ポルトガルのヴァスコ=ダ=ガマ（Vasco da Gama, 1469頃-1524）が喜望峰をまわってアフリカ

東海岸のマリンディ（Malindi, Melinde とも）経由で、インド洋を横ぎり、インド南西海岸のカリカット（Calicut）⁽⁵⁵⁾に到達した。1498年5月のことで、リスボンを出港して10ヶ月後、3隻の船と168人の乗組員を従えてのことだった。香料・宝石などを積みこんで帰途につき、1499年にリスボンへもどったのだが、その間に、3隻の船のうちの1隻を失い、乗組員も3分の2を失うほどの厳しい航海であった。しかし、このインド航路によって運ばれた香料は、オスマン＝トルコのイスラム商人が支配するインド洋・地中海沿岸地域を経て、イタリアの諸都市が手にするものよりもはるかに安く、しかも莫大な利益を生んだ。ポルトガルは、インド西海岸のゴア（Goa）を拠点にして総督にアルブケルケ（d'Albuquerque, 1453－1515）を任命し（1510年）、11年にマラッカ（Malacca）、15年にペルシア湾口のホルムズ（Hormuz）、紅海（Red Sea）の入り口のアデン（Aden）も占領し、イスラム商人の活動を封じ込め、インド洋海域の支配権の確立を目指した。

ポルトガルはさらに、1517年コロombo（Colombo）を制し、1557年マカオ（Macao）⁽⁵⁶⁾を租借し、後にポルトガル領にして、東アジアにも進出した。日本の種子島にポルトガル人が漂着して鉄砲を伝えたのは、1543年、キリスト教の伝来とほぼ同じ頃であった。

1492年10月12日、コロンブス（Christophorus Columbus, 1451－1506）のアメリカ大陸の発見を支援したのは、その年の1月イベリア半島におけるイスラム勢力の放逐に成功し、レコンキスタ（Reconquista, 国土回復運動）を完了させた、スペインのカスティリャ（Castile, [注]（40）を参照）の女王イサベル（Isabel 位1474－1504）であった。スペインの海外進出は、このレコンキスタ運動がその目標を海外へ向けたという見方もできる。

コロンブスの「新大陸発見」の余勢を駆るように、スペインは1493年、ローマ教皇アレキサンデル六世（Alexandel VI, 位1492－1503）に、ヴェルデ岬（Cape Verde）の西方560kmの子午線の西側で将来発見されるところはすべてスペイン領とすることを要請して、教書を一方的に手に入れた。当然のことながら、ポルトガルが強硬に抗議した結果、両国は1494年トルデシリャス（Tordesillas）条約⁽⁵⁷⁾を結んだ。その内容は子午線をさらに150km西に移動して、その東側をポルトガルが獲得するというものであった。スペイン、ポルトガルの両国によって、この独占的な世界の分割が勝手に決められ、とくにスペインは広大な植民地をわがものとして世界帝国の道を辿ることになった。

ポルトガル人のマゼラン（Ferdinand Magellan, 1480頃－1521）は、1519年8月スペインのカルロス一世（Carlos I, 位1516－1556）の援助を得て出発し、南アメリカの

東岸を南下して、最南端のマゼラン海峡（Strait of Magellan）を越え、広大な海原に出た。そして、彼自身が命名した「平穏な海」（Pacific Ocean）の長く単調な航海の末、1521年、彼の船隊はフィリピン（Philippines）に到達した。マゼランはここで不慮の死をとげたが、部下が残った一隻の船でスペインに帰着したのは、出発してから3年後の1522年9月のことであった。

これで、ヨーロッパとアジアを結ぶ航路は、アフリカを回る南東の航路と、南アメリカを回る南西の航路が開発されて、コロンブスが画いた「地球は丸い」ことが実証された。

3. イギリスの台頭

トルデシリャス・サラゴサの二つの条約によって独占的かつ勝手な全世界二分割を宣言したポルトガル、スペインに対して、16世紀末からイギリス・オランダ・フランスの三国が立ち向い始める。

16世紀の初期はスペイン、ポルトガルが海上の覇権を握った時代であり、スペインは西へ向ってアメリカ大陸を活動の舞台とし、アメリカ南端から太平洋に出て、フィリピン群島⁽⁵⁸⁾を手中に収めた。これに対し、主としてインド洋から東アジア沿岸にかけて勢力を振るったのがポルトガルであった。

そして、この時代のスペインの最大の敵は、ビザンツ帝国（東ローマ帝国）を滅ぼして地中海に進出したオスマン帝国（オスマン＝トルコ）であった。キリスト教世界とヨーロッパ全域の盟主を自認していたスペインにとって、地中海沿岸地域を押えていたトルコは対決しなければならない相手であった。1571年、スペイン、ローマ教皇国、ヴェネチア共和国の連合軍を率いたフェリペ二世は、オスマン帝国海軍をレパント（Lepant）⁽⁵⁹⁾沖の海戦で破り、地中海の制海権を握り、反宗教改革（反プロテスタント）の旗頭になった。

スペインの繁栄を支えていたアメリカ大陸の銀鉱石の採掘、銀の生産・供給が減少し始めた頃、ネーデルランド（Nederland）地方で独立運動が起り、その鎮圧のために膨大な戦費が必要になって、スペインの没落の影がしのびよってきた。加えて、国内の毛織物工業などがイスラム教徒の支えを失って衰退してしまうという悪条件も重なった。1570年頃のことである。

やがて、1581年ネーデルランド共和国（オランダ）がイギリスの支援のもとに、独立を宣言した。その後、オランダは商工業者などの活躍もあってアムステルダム（Amsterdam）を中心にめざましい経済発展をとげることになる。

一方、ヴァスコ＝ダ＝ガマ以来インド洋を支配し、インド洋貿易を独占してきたポルトガルは、広大な支配地域・海域を維持できるほど、本国の経済状態はよくなかったし、必要な海軍力を持ってもいなかった。とくに1580年、アフリカ遠征の失敗によってスペインに併合されてからは、その後1640年にイギリスの援助を受けて再独立を果たしたとはいえ、ポルトガルのオランダ支配は弱体化の一途を辿り、それまでも実質的にはポルトガルの貿易を支えてきたオランダ人によって、名実ともに代わられることになる。

17世紀に入って、スペイン、ポルトガルが衰え、代って海上勢力として進出してきたのが、イギリス、フランス、オランダであり、いずれも東インド会社を作って行動を開始した。そのなかで、イギリスの東方進出のきっかけの一つになったのは、スペインの無敵艦隊（Invincible Armada）の撃破であった。1588年7月、イギリスとスペインの関係は、スペインのアントワープ（Antwerp）封鎖などによるイギリスの商取引上の損害も一因となって、一層悪化し両国は戦争状態に入った。スペインは無敵艦隊を派遣して、一気にイギリス本土上陸を計ったが、ドーヴァ海峡（Straits of Dover）で、ホーキンス（Sir John Hawkins, 1532－1595）提督とドレイク（Sir Francis Drake, 1543?－1596）^{（60）}副提督の指揮する英国艦隊に大敗し、スペインの大西洋支配が揺らぐ契機を作ってしまった。

それよりまえ、ネーデルランド（オランダ）のスペインからの独立戦争が始まった1568年、スコットランド女王メアリー＝オブ＝ステュアート（Mary of Stuart, 1542－1587, 位1542－1567）が、新教徒の貴族の反乱にあってイングランドのエリザベス一世（Elizabeth I, 1533－1603, 位1558－1603）^{（61）}に保護を求めて亡命してきた。しかし、エリザベスはメアリーが旧教徒であることや、イングランド王の王位を狙っているとの理由をつけて監禁してしまった。

エリザベスの異母姉メアリー一世（Mary of Tudor, 1519－1558, 位1553－1558）を妃としたスペインのフェリペ二世（注58参照）が、メアリー一世の死後エリザベス一世に求婚すると、彼女は口実を設けてはねつけたばかりか、同じ新教国のオランダのスペインからの独立を助けた。そこで、フェリペ二世はイギリス国内のメアリー＝オブ＝ステュアートに救いの手をのべたのだが、1586年にエリザベス暗殺計画が発覚し、これに連座したとしてメアリーは翌年エリザベスによって処刑されてしまった。

激怒したフェリペは、イギリス打倒の軍を起し、英本土上陸を期して艦船130余隻、海軍の兵7,000、陸軍の兵16,000、大砲2,500門の文字通りの無敵の武装船団を組織した。これに対してエリザベスは、軍艦34隻と徴発した小型船（海賊船など）計200の艦船、兵力

はわずか6,000の軍団をもって対抗した。1588年7月29日の夜半、スペイン船団に、おりしも吹き荒れる暴風とそれを利用した火船（わらや薪などを積んで火をつけ、風上から流して敵の船を焼き討ちにする船や筏）を使って奇襲攻撃をかけた。不意をつかれ、すっかり戦意を喪失したスペインの船団は、散り散りになって遁走し、本国へ辿り着いたのは船65隻、兵員約10,000人であったという。

イギリスの歴史上、大きな転換点になったこのスペインの無敵艦隊撃滅の陰には、このような国際関係がひそんでいて、さらに海戦そのものにも両軍の士気の違いやカレー（Calais）沖というイギリスに近い英仏海峡で戦われたという、地理的条件の有利さもイギリス側に味方する要件としてあった。

いっぽう、1588年エリザベス一世が即位した当時は、イギリスもスペイン、フランスなどと同じように、相い次ぐ戦争による赤字財政に苦しんでいるときであった。メアリー一世（1516-1558, 位1553-1558）時代に、アンヴェール（Anvers, Antwerpの別名）の商人から借り入れた負債を含めて、1559年（エリザベス即位の翌年）において227,000ポンドもの負債があった。これは当時破産状態にあったスペインやフランスの場合に比べれば、さして多い額ではなかったが、即位したときのエリザベスには、早速、例えばフランスと結託しようとするスコットランドを牽制するために、約180,000ポンドの軍資金が必要になっていたという事情も重なっていた。

そこで、グresham（注（61）参照）を利用して強引な経費削減などの手段を講じて、1569年にはジェノヴァ（Genova）の商人から借りた450,000ダカット（ducats⁶²）を約100,000ポンドに負債を減らした。その頃、カリブ海（Caribbean Sea）でのホーキンズ、ドレイク（注（60）参照）の活動は、彼らを海の犬（sea dogs）と呼び、その航海を掠奪航海と称するほど過激なものになっていたが、エリザベス女王はスペインとの全面戦争に発展するという懸念はあったが、彼らの行為を黙認していた。とくにドレイクが目をつけたのは、スペインがパナマ（Panama）地域から本国へ向けて積み出す銀であり、ドレイク自身が負傷して失敗に終わる場合もあったが、女王や政界の大立者たちの支援・出資もあって掠奪航海を繰り返した。

ドレイクのあとに続いて、カリブの海に侵入して一旗あげようとするイギリスの海賊たちは後を絶たなかったが、ドレイク自身はもっと広い世界に乗り出そうとしていた。1577年12月13日、ドレイクの船団5隻がプリマス（Plymouth）を出港して、世界周航の掠奪の航海に出た。途中、チリ（Chile）やペルー（Peru）などのスペイン領の港で莫大な金

銀を奪い、カリフォルニア（California）経由で太平洋を横断し、香料諸島（Spice Islands⁶³）で6トンもの香料を積み込んで、イギリスの船としては初めてインド洋（Indian Ocean）に入った。財宝を満載したドレイクの船がアフリカの南端の喜望峯（Cape of Good Hope）回りでプリマスに帰着したのは、1580年9月26日であった。

ドレイクのもたらした富は、それまでのイギリスの負債を帳消しにして余りあるほどの莫大なものであった。イギリスの有名な経済学者ケインズ（John Maynard Keynes, 1st Baron of Tilton, 1883-1946）は次のように言っている。

「ドレイクが運んできた戦利品が、イギリスの外国投資の基礎を作り、その源泉となったといってもいいであろう。エリザベスは配当によって全外債（10万ポンド）を返済し、約4万2千ポンドにも上る残額の一部をレヴァント会社⁶⁴に投資した。そのレヴァント会社の上げた利益から、イギリス東インド会社が設立された」

その後、さらに激化する一方の私掠船の海賊行為は、エリザベスとその後のイギリスの王たちに有力な財源を与え続けることになり、イギリスの資本蓄積につながった。大国スペインが、人材・産業に恵まれずにいたずらにアメリカ植民地の富、財宝を浪費している間に、イギリスは無敵艦隊撃破を頂点とする危い橋を渡りながらも、着々と経済発展の基礎を築き、イギリス資本蓄積の布石をして、その地位をスペインに取って代ろうとしていた。

〔注〕

- （1） Charles Lamb（1775-1834）イギリスの随筆家・評論家。エリア随筆（The Essays of Elia, 1823とThe Last Essays of Elia, 1833を合わせたもの）の著者。humourとpathosを交錯させ、古い雅やかな文体を持った作品で、イギリス・エッセイ文学の最高峰に位置する。筆名Elia [i:liə] は、ラムが最初に勤めた南海商会という会社の同僚のあるイタリア人の名前を借りたもの。
- （2） The Last Essays of Elia の中の有名な一篇。ラムはこの随筆の中で33年間勤めた東インド会社からの隠退の気持ちを述べている。
- （3） ロンドンの下町のイングランド銀行（Bank of England）とロンドン塔（Tower of London）との間の横町。植民地相手の問屋街の中心で、茶の貿易・取引で賑わった。数多くの高い3本マストの快速帆船（tea clippers）が運んでくるお茶（tea）

は、ロンドン橋（London Bridge）の近くのテムズ河北岸のMincing Laneで競売に付された。mincingは「気取った」の意味。

ラムが実際に勤めた東インド会社は、それより北寄りのレデンホール街（Leadenhall Street）にあったし、ちょうど日本のかつての満鉄のような半官半民の大商事会社であったのを、わざと個人資本の商店のように書いている。

(4) Charles Lamb:Essays of Elia, Last Essays of Elia (Everyman's Library 14)
p.226

(5) 1710年、南米貿易を目的としてロバート・ハーリー（Robert Harley, 後のオクスフォード伯爵）が創設した。ラムが入社した頃は、恐慌の嵐に吹きまわられて没落し、悪名高い泡沫会社になっていた。ロンドンの繁華街の中で、その廃墟のような姿をさらしていたが、ラムは1790年にこの会社に入社した。

(6) 1600年12月31日、「イギリス東インド会社」（東インド諸地域において商取引を行うロンドンの商人たちの会社）を法人として認可する特許状が、エリザベス女王（Elizabeth I）によって下付された。当時の社屋は、East India Houseと呼ばれ、ロンドンのレデンホール（Leadenhall）街の、現在のロイド（Lloyd's）の社屋の一部が占めているところにあった。

(7) ibid. p.227

(8) ラムの給料は、当時700ポンドだったというのでその3分の2は450ポンドぐらいである。

(9) 会社の重役たちの仮名を連ねたもの

(10) [éستou perpétu:á:] ラテン語で「永遠なれかし（May she live forever.）」ここでは、「社運の永遠に盛んならんことを！」ぐらいの意味。ibid. p.227 - 228

(11) 「威厳ある悠揚せまらぬ風格」

(12) 「能事終れり」「すべき事はした」

(13) ibid.p.232

(14) ローマの詩人。Virgilとも。(70-19 B.C.)

(15) アイルランドの俳優・劇作家。Andalsia (1782), Wild Oats (1791) などの名作がある。(1747-1833)

(16) この随筆は、1825年5月ロンドン・マガジーン（London Magazine）に発表された。

- (17) John Stuart Mill (1806－1873) イギリスの哲学者、経済学者。主著「経済学原理」(Principles of Political Economy)。父ジェームズ・ミル (James Mill, 1773－1836) も主著「英領インド史」(History of British India) を持つ哲学者、経済学者。ジョンはこの父から英才教育を受けた自由主義経済学の代表者。
- 1823年、父ジェームズのもとに東インド会社の事務員になり、1858年に会社が解散するまで35年間勤めた。東インド会社解散後、下院議員に選出された (1865－68)。
- (18) Thomas Love Peacock (1785－1866) イギリスの小説家、詩人。1819年東インド会社に入り、1837年文書調査部長になり、実務的手腕を発揮し在職20年に及んだ。
- この3人が一緒に在職した期間は2年、ラムとミルは2年、ラムとピーコックは6年、ミルとピーコックは16年ともに在職したことになる。
- (19) イタリアのヴェネチア (Venezia) の商人・旅行家。1271年、17歳で父、叔父とともにモンゴル帝国 (Mongol Empire) に渡り、当時の元帝忽必烈 (フビライ=ハン、Kublai Khan, 1216?－1294) に重用され (1275－1292)、中国内地を旅行して1295年、海路インドを経て帰国した。
- (20) 当時1291年頃から、イタリアの商業都市ヴェネチアとジェノヴァとの貿易上の争いは、両都市国家間の海戦にまで発展し、ヴェネチア側は敗北してマルコ=ポーロも捕えられていた。捕虜といっても彼の場合は、丁重な扱いを受けたという。後に両国の間で平和条約が結ばれ、マルコ=ポーロも釈放された。
- (21) 中世後期の自由 (都) 市 (commune)、国王・封建諸侯から自治権を獲得したイタリアやフランスの都市、イタリアではフィレンツェ、シエナ、ピザ、ジェノヴァ、ヴェネチアなどの都市。
- (22) 元の皇帝フビライは、日本に貢物を持つ使者を寄越すように求めたが、時の鎌倉幕府の執権、つまり実際の政治を左右する最高責任者、北条時宗に拒否され、1274年10月と1281年7月の二度にわたって10万人の兵を送って、壱岐・対馬から九州の博多に迫ったが、二度とも暴風雨に見舞われて逃げ帰った。日本史では、蒙古襲来、元寇の役という。
- (23) マルコ=ポーロは説明する。ジパング (日本) はモンゴルの東方にある大きな島で、2400キロ離れたところにある。住民は色白で文化の程度は高く、資源に恵まれた豊かな生活をしている。偶像を崇拝し、独立心の強い人々がいて、黄金と真珠は無尽蔵なほどあるが、国王は輸出を禁止している。大陸からあまりにも遠く離れている

ので、商人もあまり訪れず、富の流出も少ない。王の宮殿にはおびただしい量の黄金が用いられ、屋敷や床などは黄金が敷きつめられている。フビライ=ハンはこの黄金の島を手に入れる計画を立てたなどと、当時日本は鎌倉幕府が武家政治をしき、公家社会が武家に圧倒されていた時代を考えると、著しく誇張した表現になっている。

- (24) Sir Mark Aurel Stein (1862-1943) イギリスの考古学者・探検家。アジア全域の踏査・研究をして、多くの古文書、仏画、仏典などを発見した。
- (25) Sven Anders Hedin (1865-1952) スウェーデンの地理学者。中央アジアから西アジアを探検・調査して、遺跡などを発見した。
- (26) フランチェスコ派の宣教師、他に、カルピニ (Carpini, 1182-1252)、ルブルック (Rubruck, 1220?-1293?) が同派の修道士として活躍した。
- (27) Silk Road (絹の道、中国から絹をヨーロッパへ運んだために名づけられた。) 東西を結ぶ交通路は紀元前3000年頃から、砂漠に点在するオアシス (oasis, 語源はエジプト語で、「憩いの地」の意味) を結ぶ道として開拓され、その周辺の遊牧民や農耕民を対象とした商業活動が活発に行われ、例えば、クチャ (庫車、亀茲とも書く、天山南路北方ルートの都市で当時人口10万人を数えた) のようなオアシス都市を生んだ。
- (28) ローマ時代の1世紀頃には、対インド貿易が盛んに行われ、インドからは胡椒・綿布・真珠・象牙などが輸出され、ローマからは陶器・ガラス器・酒・金貨などが輸出されている。遠く東南アジアや中国とまでも間接的に、マライ・ポリネシア系の商人などを通して交流していたことが、ギリシアの航海家によって記述されている。
- (29) イスラム教徒 (Islām)。イスラム世界は、当時西南アジア、北アフリカ、ヨーロッパのイベリア半島 (Iberian Pen.) にまで及び、地中海 (Mediterranean Sea) は、ムスリムの海とまでいわれた。
- (30) ムスリムの商人たちは、アフリカ・インド・東南アジア・中国へと進出し、商業活動の対象として金・奴隷・香辛料・香料・陶磁器・絹織物など多品目の商品を扱い、たとえばティグリス (Tigris) 川西岸の小村だったバグダード (Baghdad) のような都市を東西貿易路の接点にして繁栄させた。
- (31) アラビア (Arabia) 半島の西部の都市メッカ (Mecca) は、マホメット (Mahomet, アラビア語でMohammad) の生地、カーバ (Kaaba, Ka'bah) 神殿 (メッカ

のモスク、Mosque の中心になっている石造の聖殿、イスラム教徒の巡礼の対象で、この周囲をまわって聖殿の東南隅に安置されている黒石に接吻する）があり、イスラム教の最も重要な聖地として多数の巡礼者が訪れる。

- (32) Islām（イスラームとも）イスラム教の公用語のアラビア語、Arabicで「服従」、surrender to God を意味する。西暦610年から630年頃に、マホメットが創め、アラブ民族によって発展した。聖地メッカを中心として、アラビア半島・シリア・メソポタミア・小アジア、西は北アフリカを経て一時はイベリア半島、東はインド・中央アジアを経て中国および東インド諸島（マレー諸島）一帯、南は黒人のアフリカ各地に民族を超えて広がった。独自の文化・政治組織を持ち、とくにトルコ・イラン・イラク・エジプト・サウジ=アラビア・アフガニスタン・パキスタンなどでは国家の基礎を成している。教義はアラビアの民族信仰にキリスト・ユダヤ両教を摂取したものといわれる。イスラム文化は、中世に古代ギリシア文化を継承し、戒律（祈とう、断食、聖地巡礼など）に伴う法学と、地理学・医学など近代ヨーロッパ文化の誕生にも寄与した。イスラム教のほかに、回教、マホメット教とも呼ばれる。
- (33) 1325年、22歳のときにメッカへの巡礼のため故郷を出て、エジプト・シリアをへてメッカに巡礼したあと、イラク・小アジアを旅し、33年から約9年間インドに滞在し、ついで、スマトラ・泉州を経由して元の時代の大都（北京）に到達した。帰路は再びスマトラ・シリア・エジプトを通り、49年にモロッコのフェス（Fés）に帰着した。彼のこの旅行も含めた30年、12万キロにも及ぶ遠征は彼自身の口述によって記録として残され、14世紀前半頃のイスラム世界についての正確な情報を伝えている。マルコ=ポーロの「東方見聞録」とともに、イブン=バットゥータの「三大陸周遊記」が口述筆記されたものであるということも、ヨーロッパの人々の東方に関する知識の普及をさらに高めた。
- (34) イスラム教徒は、ギリシアの医学・天文学・幾何学・地理学などを基礎にして、臨床や観測・実験・検証によってそれらをさらに高度なものとし、東方のインドからも同じような分野の学問を学んだが、とくに数学の分野で数字（のちのアラビア数字、ローマ数字に対して）と十進法とゼロの考え方を確立したことは有名である。これらの成果がヨーロッパへ伝えられて、やがては近代科学への道につながるようになった。
- (35) ペルシャ湾からインド洋、中国の広州にかけて、アラビア海、アフリカ東海岸など

で用いる低い一本マストで大三角帆を備えた、150-200トンの沿岸航行用の帆船。

- (36) インド洋上の高気圧から生じ、インド洋や南アジアで風や雨に姿を変えて、今でも各地域の農業、ひいては経済に重要な影響を与えている。例えば、インドでは人々はいまも雨を待って耕作を始め、風を受けて漁に出る。

the dry monsoon 冬モンスーン、10月から12月に吹く北東風。

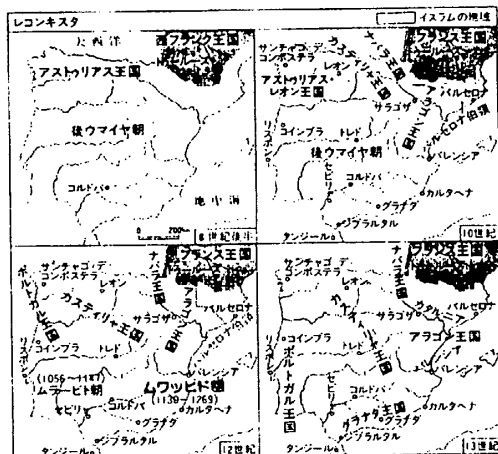
the wet monsoon 夏モンスーン、5月から9月に吹く南西風、多くの雨をとまなう。（「イスラム商人の活躍」の図参照）

- (37) 磁石を利用した羅針盤が航海で使われたのは、中国北宋末の11世紀末ごろが最初で、イスラム世界を経てヨーロッパへ伝えられた。

- (38) クレルモン公会議とも呼ばれ、1095年11月17日～27日の11日間、聖職者をはじめ貴族諸侯・騎士などが参列し、多くの民衆が傍聴する大集会になった。教皇は、最終日の会議終了の直前に、「東方で、私たちと同じくキリストを信ずる人たちが苦しめられている。そして彼らは私たちに救いを求めている。なぜか。それは異教徒が聖地を占領し、キリスト教徒を迫害しているからである。……神はその解放をみずからの業として遂行される。この神のみ業に参加するものは神の賞賛を与えられ、罪をゆるされ、償いを免ぜられる。キリスト教徒どうしの不正な戦いを止めて（当時東西各地にキリスト教の小王国が分立して対立していた）、神のための正義の戦いに参加せよ。この呼びかけに応じた者には、現世、来世を問わず、すばらしい褒賞が約束されている。ためらうことはない。現世のどんな絆も、あなた方をつなぎとめることはできない。なぜならば、この企ては神自身が指導者なのだから」という意味の演説をし、各地に勸説使を派遣し檄を飛ばした。

- (39) Jerusalem（アラビア語でクドス、al-Quds）は、ユダヤ教徒（Judaists）にとってはその最盛期（前960頃-前922頃）の王ソロモン（Solomon）の建てた神聖な神殿のある場所であり、キリスト教徒（Christians）にとっては、イエス（Jesus）の死と復活の舞台であった。また、イスラム教徒（Islām）にとっても、エルサレムはメッカ（Mecca）、メディナ（Medina、メッカの北方約300km）に次ぐ第三の聖地であった。現在でも折りにふれ対立・抗争の地になっている。イスラム教徒の間には、預言者ムハマンド（Muhammad、マホメット Mahomet, 570頃-632）が天馬に乗ってメッカからエルサレムに夜の旅をして、天に昇り神アッラー（Allā, ?-619）に見えた（610年頃）[※]と言われている。

(40)

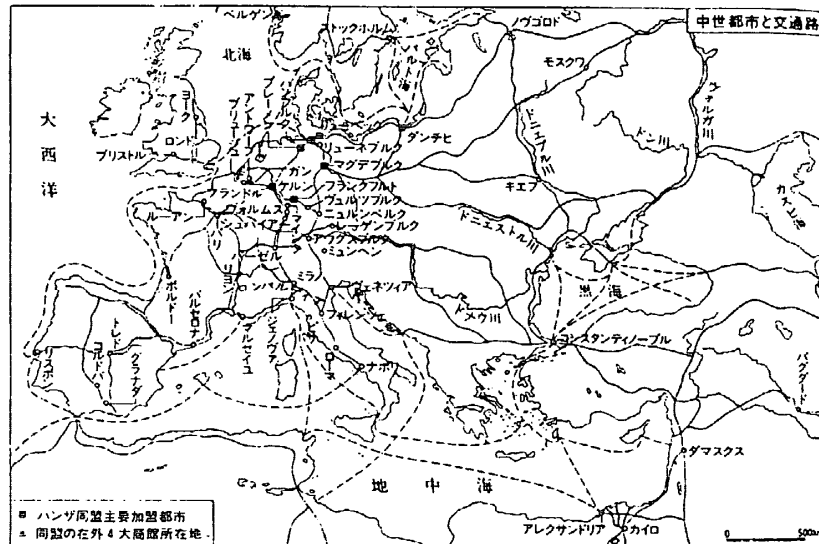


イスラム地域の推移：(1)～(4)がイスラム地域

- (1)後ウマイヤ朝
- (2)後ウマイヤ朝、アラゴン王国
- (3)ムラービト朝、ムワツヒト朝
- (4)グラナダ王国

- (41) 8－10世紀にかけてヨーロッパ各国の沿岸を掠奪したスカンディナヴィア（Scandinavia）の海賊として知られるが、氷河に削り取られたスカンディナヴィア半島やユトランド（Jutland）半島の地はやせていて農業にむかず、住民は狩猟・牧畜・漁業などで生計を立てる以外に、早くから他の地域との交流・交易に乗り出していた。ヴァイキングの活動は9世紀以降爆発的に活発になり、その内容は主として商業・植民（移住）・征服・略奪であった。
- (42) the Levant, 地中海とエーゲ海東岸の地方、とくにシリア（Syria）、レバノン（Lebanon）、イスラエル（Israel）をレヴァント諸国（the Levant States）という。
- (43) イギリスとフランスの百年戦争（1339－1453）の背景には、このヨーロッパ有数の毛織物業地帯であった、現在のオランダとベルギーにまたがるフランドル地方の支配をめぐる両国間の積年の対立があった。
- (44) パリの東南方の地域で、トロア（Troyes）・ジジョン（Dijon）などの都市で定期的に、月を決めて大市が開かれ、地元の商人や、外国の商人が多数出入りして賑わった。また、扱う商品によって「皮の市」、「織物の市」、「秤の市（目方や量で売買する）」などとその市によってきめられた。さらに、使われる各国の貨幣を両替するために銀行のような仕事をするものや、信用取り引きなどをするものまで現われた。
- (45) 北海・バルト海貿易で活躍した商人の間で、自然に発生した仲間の団体が原型で加盟各都市への規制もあまりなかった。しかし、商圏を守るために、1370年、デンマーク海軍と戦い撃破するなど団結は固かった。ハンザ（Hansa）とは「商人の仲間」

の意味のドイツ語。

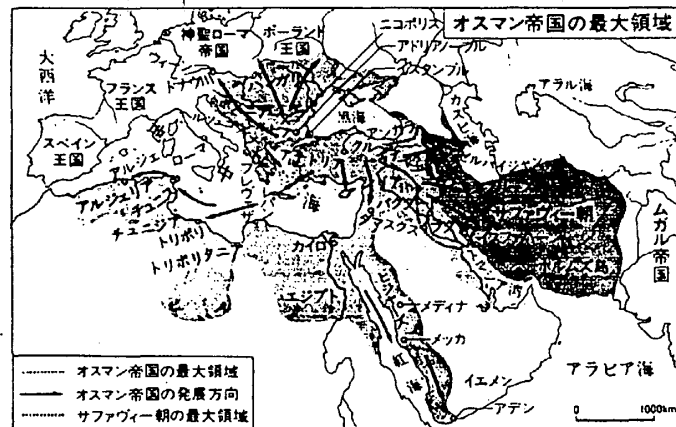


- (46) ドイツを中心にヨーロッパ各国が参加し30年（1618－1648）続いた宗教戦争。ドイツではキリスト教新旧両教徒諸侯の内戦としてボヘミア（Bohemia）で始まり、旧教側にスペイン、新教側にデンマーク・スウェーデン・フランスが加担し国際戦争に発展した。ウエストファリア（Westphalia）条約で終結し、宗教戦争として史上最後の戦争になった。また、この条約でネーデルランド（Nederland, オランダ）共和国とスイス（Switzerland）の独立が国際的に承認された。
- (47) 中世ヨーロッパの都市に生れた特権的同業者組合。業種別ギルドが都市の実権を握ることもあったが、産業革命（18世紀半ば）以降の近代産業の成立とともに衰退した。
- (48) ドイツで12、3世紀頃から手工業者仲間が、商人ギルドに対抗するために作った手工業ギルド、同職組合。
- (49) イタリアのフィレンツェの富豪・政治家の一族。14世紀から商業・銀行業で台頭し、15世紀中頃にフィレンツェ市の実権を掌握した。政治だけでなく、学問・芸術の保護にも乗り出し、ルネッサンス（Renaissance）にも寄与し、教皇レオ十世、クレメンス七世を輩出した。1737年断絶。
- (50) 15－16世紀に巨富を誇った南ドイツのアウグスブルク（Augsburg）の商家。東方貿易・鉱山（銀山）の独占的経営で栄え、巨額の融資を行い、皇帝や教皇を動かすほどの権勢を振った。

- (51) アラゴン（Aragoon）王国（1035年建国）の王子フェルナンド（Fernando, 位1479－1516）とカスティリャ（Castile）の王女イザベル（Isabel, 1474－1504）が、1469年に結婚し、1479年に両国が統一されてスペイン王国が誕生した。1492年、スペイン国王が、イスラム教徒の最後の砦グラナダ（Granada）王国に入り、イスラム教徒たちの多くは北アフリカへ逃れた。これによって、約800年にわたるイベリア半島のイスラム支配が終った。イスラム教徒たちが建てたアルハンブラ（Alhambra）宮殿などは、美しい建築様式とアラベスク模様（Arabesque）を持ち、スペイン＝イスラム文化の美を見せている。同じ1492年、イザベルの支援を受けたコロンブス（Christophorus Columbus, 1451－1506）が新大陸を発見したことにより、スペインのアメリカ大陸への道も開かれ、スペインはヨーロッパにおける強大な国になっていく手がかりをつかんだ。

いっぽう、ポルトガル王国は、1143年ローマ教皇の仲介でカスティリャ（Castile）から分離して独立しアフォンソー一世（Afonso I, 位1139－85）が引き続いて王の位につき、13世紀半ばまでにレコンキスタを完了した。〔注（40）参照〕

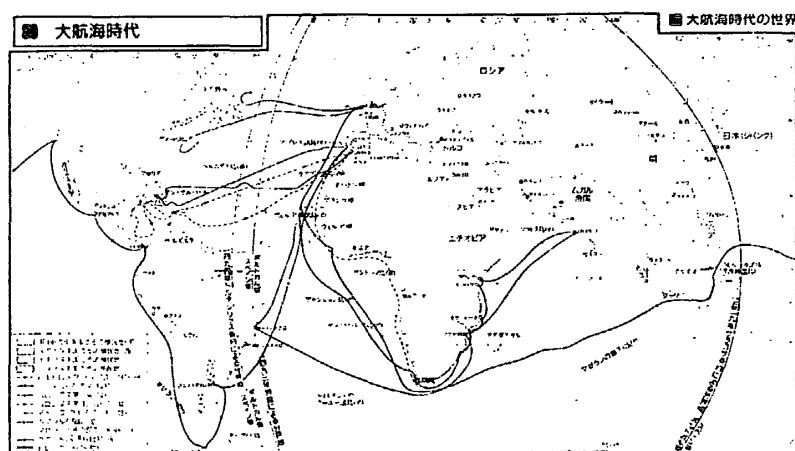
- (52) オスマン帝国（オスマン＝トルコ）はオスマン（1258－1325）が建てたトルコ系イスラム国家。



- (53) 大航海時代にヨーロッパの人々に一獲千金の夢を抱かせたものの一つは、香料を売買することであった。コロンブスはドミニカ（Dominica）でオールスパイス（allspice, ジャマイカ, Jamaica原産で、未熟な果実を乾燥したもの。シナモン・ナツメグ・クローブの香りを持つ香辛料）を発見し、ガマ（ヴァスコ＝ダ＝ガマ（Vasco da Gama, 1469?－1524）は、インドの西海岸でその土地原産の胡椒に出会っている。

- (54) 1600年に設立されたイギリスの東インド会社も、当時のエリザベス一世(Elizabeth I, 位1558-1603)の特許状を与えられ、支援を受けた。当時イギリスは絶対主義・中央集権国家として最盛期にあり、このような王権の支援が各国での海外進出の一つのパターンにもなっていた。
- (55) 17世紀末、イギリスの東インド会社が大量の綿織物を輸入したが、その主産地がこのカリカットだった。この綿織物がイギリスの産業革命(Industrial Revolution)の口火をきることになる。当時のカリカットの王にガマが「我こそは、多くの国々を領土に持ち、いかなる王よりも金持のポルトガルの王によってつかわされた使節だ」と言って大見得を切り、贈りものとして、「12枚の帯、緋色の頭巾4枚、帽子6個、サンゴ4連、鉢6個、砂糖1箱、油、蜂蜜など」を差し出したところ、王の執事は、「こんなものはとても王に捧げるものなどではない。メッカやインド各地からやってくるもっと貧しいイスラムの商人たちでさえ、これよりましなものを持ってくる」と言って馬鹿にされ、屈辱を味わわされた。ちょうどマルコ=ポーロがモンゴル帝国に入って、その豊かさに驚嘆したのと同じように、当然のことながらガマには現地の状況の認識が不足していた。
- (56) 中国広東省南部に接するポルトガルの植民地。南シナ海に臨む港湾都市で香港の対岸にある。政庁公認のカジノ(casino)があり、観光事業が盛んで、住民の大部分が中国人。17、8世紀のポルトガルのアジア貿易とカトリック布教の根拠地。1999年中国に返還されることになっている。

(57)



スペインとポルトガルの抗争はその後も続き、1529年サラゴサ（Zaragoza）条約で、スペインのフィリピンと、ポルトガルのモルッカ諸島、（Moluccas）支配

が相互に承認された。

- (58) フィリピン群島（諸島）の名は、当時のスペイン国王フェリペ二世（Felipe II, 位1556－1598）にちなんで付けられた。コロンブスの「発見」から80年ほどの間に、スペインは南北アメリカ、西インド諸島、フィリピン群島など、本国の数十倍もの海外領土を持つ一大植民帝国になった。16世紀後半のスペインは、まさに史上最初の大帝国「太陽の沈むことのない帝国」であった。
- (59) ギリシアのペロポネソス半島（Peloponnesos Pen.）の北側の海域。
- (60) 16世紀末のエリザベス一世時代のイギリスの航海者であったホーキンズに従って、私掠船（私拿捕船）の船長になり、西インドの奴隷貿易やスペインの銀船隊などの略奪に従事した。イギリス人最初の世界周航（西回り）に成功。私掠船（Privateer）は私的に略奪を行う個人所有の船だが、公の（国王の）免許状を持っていて、交戦国の商船までも攻撃・掠奪していいという点で、いわゆる海賊船とは異なる。
- (61) 16～17世紀のチューダー（Tudor）王朝（1485－1603）最後の国王。チューダー絶対主義の最盛期をもたらした。「私はイングランドと結婚している」と言って生涯独身を通した。国内の政治・経済・宗教などの安定・統一を成し遂げたほか、対外的には、オランダの独立を助け、私掠船（私拿捕船）を後援しスペインのアメリカ大陸からの銀船隊襲撃、掠奪を公認し奨励した。スペイン敗退のきっかけになった無敵艦隊を、ホーキンズ、ドレークのイギリス艦隊に撃滅させた。

さらに、経済顧問として登用した商人出身のグレシャム（Sir Thomas Gresham, 1519?－1579）に、スペインの圧迫による毛織物業界の長期にわたる不況からの脱出を可能にさせるなど、経済的危機の克服に成功するいろいろな手を打った。晩年には、国家が保護・干渉することによって貿易・商業活動からの利益を増大させようとする、いわゆる重商主義政策を強化して、特権商人たちに独占権を与えて商工業・貿易を保護し国益の増大を計り、成果を収めた。その最大の施策が、1600年のイギリス東インド会社の設立であり、喜望峰以东の東方貿易・東方地域の経営権を独占させたことであった。

このような強引ともいえる海外進出、市場拡大の試みも、国内に抱える産業の不振、労働人口の調整などの不況打開の政策と密接に関係していた。しかし概観すれば、イギリスの歴史上この時代は国内外における活躍・発展の時期であり、「黄金時代」（the Golden Age, Zenith）であった。外には航海・通商、内にはシェク

スピア（William Shakespeare, 1564－1616）を頂点とする、宮廷中心のエリザベス朝文学の隆昌を見た時期であった。例えば、シェクスピアの「ヴェニスの商人」（The Merchant of Venice (1596) も、イタリアの二つの小説を下書にしたとはいえ、このような時代背景から生れた作品である。

ところがこの国運隆盛の時代も、ようやくその陰りを見せ始める。すなわち、国王の操縦を排して自主的運営を望む議会、種々の独占権乱発に反対する中産階級の市民、宗教的圧迫に反発する清教徒（Puritans）らの反抗が勢いを増し、次のスチュアート（Stuart）王朝（1371－1603は Scotland を、1603－1714は Scotland と England を統治した）下の、市民革命への下地ができつつあった。そして、スコットランドからやってきて、新しい王朝を起こしたジェームズ六世（James VI、1566－1625）、つまり後のジェームズ一世（James I、1603－1625）のもとで、国民の不満が噴き出るたびに、このエリザベス女王の治世がイギリス国民にとっては、古き良き時代と映ったのである。

- (62) シェクスピアの「ヴェニスの商人」の第1幕第3場の昌頭に、高利貸シャイロック（Shylock）の台詞として、“Three thousand ducats; well.”（Macmillan版1948）がある。ducatは中世ヨーロッパ諸国の各地で発行された金貨、銀貨でとくに1284年にヴェネチアで発行されたもの。dukeあるいはduchessの刻印があったという。
- (63) または、モルッカ諸島（Moluccas Islands）、インドネシア（Indonesia）のセレベス（Celebes）島とニューギニア（New Guinea）島の間の島々。
- (64) レヴァント貿易、つまりトルコ貿易のために、1581年に設立された。

参考・引用文献

1. Charles Lamb: Essays of Elia, Last Essays of Elia Everyman's Library 14
London J.M.Dent & Sons Ltd. 1957
2. エリア随筆抄 C.ラム著 山内義雄訳 角川書店1953
3. チャールズ・ラム傳 福原麟太郎著 福武書店1982
4. 講座 英米文学史13 批評・評論Ⅱ 小川和夫他著 大修館書店1982
5. 英文学ハンドブック——「作家と作品シリーズ」〈第2期No.41〉 LAMB
E. ブランデン著 山内久明訳 研究社1972

6. ロンドン歴史物語 川成洋・石原孝哉著 丸善ライブラリー1994
7. マルコ=ポーロ東方見聞録 青木富太郎訳 現代教養文庫 社会思想社1983
8. 総合地歴新地図——世界・日本—— 新訂版 帝国書院1996
9. Atlas of World Exploration Times Atlas F. アルメスト編 原書房1995
10. 人物世界史事典 欧米篇 山村良橘著 講談社+α文庫1996
11. カラー版 世界史図説 2訂版 飯田國雄他編著 東京書籍1996
12. 西欧と世界 西洋史（4）木村尚三郎編 有斐閣新書1981
13. 世界史はどう見るべきか 謝 世輝著 大和出版1975
14. これでいいのか世界史教科書 謝 世輝著 カッパ・サイエンス 光文社1994
15. 詳説 世界史研究 木下康彦他編 山川出版社1995
16. 〔人物篇〕世界の歴史がわかる本 「ルネッサンス・大航海時代～明・清帝国」篇
綿引 弘著 三笠書房1993
17. 教養としての世界史 西村貞二著 講談社現代新書1985
18. ルネッサンス 新書西洋史4 会田雄次著 講談社現代新書1985
19. 絶対王制の時代 新書西洋史5 前川貞次郎著 講談社現代新書1995
20. アジア史概説 宮崎市定著 中公文庫1992
21. 十字軍 G. タート著 知の再発見双書30 創元社1996
22. アラビアン・ナイト99の謎 矢島文夫著 PHP文庫1992
23. 元の大都——マルコ=ポーロの時代の北京—— 陳 高華著 佐竹靖彦訳 中公新書1984
24. NHK教育セミナー 歴史で見る世界 ビデオ「拡大するイスラム世界」
～オスマン帝国～ 後藤 明解説1996
25. NHK教育セミナー 歴史で見る世界 ビデオ「南アジアの変容」 長崎暢子解説1996
26. NHK総合テレビ ビデオ「モンスーンロード・アジアを駆ける風と大地の物語」
1996
27. 世界の歴史がわかる本——時代の転換が手にとるようにわかる—— 綿引 弘著
三笠書房 1995
28. イギリスの生活と文化事典 安東伸介他編 研究社出版 1989
29. ヨーロッパの封建都市 —中世都市の成立と発展— 鯖田豊之著 講談社学術文庫1994
30. 略奪の海カリブ もう一つのラテンアメリカ史 増田義郎著 岩波新書1989

31. この一冊で世界の歴史がわかる！ 国の興亡、民族の盛衰——その時、歴史はどう動いたか？ 水村光男著 三笠書房1996
32. 人物世界史Ⅰ 西洋編 古代～17世紀 今井 宏編 山川出版社1995
33. W.Shakespeare : The Merchant of Venice Macmillan 1948
34. 大航海時代 《ビジュアル版》世界の歴史13 増田義郎著 講談社1984